

新篇
路傍の石

新篇

路傍の石

山本有三

昭和十六年七月二十五日印
昭和十六年八月一日第一刷發行

新篇路傍の石

定價貳圓

著者 山本有三

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地

發行者 岩波茂雄

東京市神田區錦町三丁目十一番地

印刷者 白井赫太郎

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地

發行所 岩波書店

電話九段(33)一八七番
振替口座東京二六二四〇番
會員番號一〇二〇三七番

配給元

東京市神田區
淡路町二丁目九番地

日本出版配給株式會社

本製島寺 刷印社興精

すまし致替取おいさ下出申お接直らたしまりあが品な全完不の等丁亂丁落

名著複刻全集 近代文学館 昭和44年9月

新篇
路傍の石

旧稿

東京大阪兩朝日新聞に發表

昭和十二年一月一日より

同年六月十八日まで

改稿

「主婦之友」に發表

昭和十三年十一月号より

同十五年七月号まで

目次

くち絵のかはり 七

第一部

中学志望 三

その夜のことば 四

実学 九

意地 九

赤い糸 二八

吾一 一九

先祖と家から 一八

うつりかはり	二二三
前掛け	二三九
やぶ入り	二六六
物價とうき	二九四
東京	三三三
ダルマさん、ダルマさん	三五〇
かんなん汝を玉にす	三七五
いひわけでは、ランプはつかない	四〇六
次野先生	四三〇
日本はどこにある？	四五八
学校	四八六
嵐のあと	五一四
五十銭銀貨	五四二

お月さまは、なせ落ちないのか・・・・・・・・五七〇

あとがき（吉田甲子太郎）・・・・・・・・五九五

裝釘
南澤
用介

くち絵のかはりに

そのとき、吾一は学校から帰ったばかりだった。はかまをぬいでゐるところへ、おとつあんがひよっこり帰ってきた。おとつあんは彼に銅貨を一つ渡して、焼きイモを買ってこいといった。よっぽど腹がすいてゐるらしく、いやにせか／＼してゐた。

吾一は急いで路地を駆けだして行つた。

ちやうどおやつ時刻だったので、焼きイモ屋の店さきは、ふろしきを持った小僧だの、をかもちをさげた女中が、黒光りのする大きなかまの前にいっぱい立ってゐた。なかなか順がまはってこないで、吾一はいら／＼したが、やっと彼の番になった。

「おつぎは、おいくら。」

イモ屋のおやぢは長いタケのはしを動かしながら、いそがしさうにいった。

大きな店の小僧たちが、十銭も二十銭も買って行くなかで少しばかり買ふのは、吾一はなんとなく、きまりがわるかった。彼はちひさな声で「一銭。」といった。

「おいきた。」

主人は威勢よく答へて、かまのなかから、なれた手つきで、ひよい／＼とイモをはさみあげた。

けふはバカにまけてくれるんだなあ、と吾一は思った。やがて新聞にくるんでくれた焼きイモを受け取って、厚いかまのふちの上に、一棧銅貨をおくと、

「あつ、ちよつと待った！」

と、おやぢはとんきやうな声をだして、吾一から急に包みを取りもどした。そして、三つ、六つと勘定（かんぢやう）しながら、包みのなかのものを、かまへ返しはじめた。おやぢは一棧を十棧と聞きちがへたものらしい。向かうがまちがへたのではあるけれども、いったん包んでくれたものゝなかから、数をへらされることは、なんともいへない侮辱を感じた。吾一はかまの前に立ってゐることが苦しくなつて、逃げださうとした。そのとき、

「はいよ。」

といって、おやぢがちひさな袋を渡した。吾一はそれを持つと、どろばうのやうに、そこそと店さきから姿をけした。

うちに帰ると、どうしたのか、おとつつあんはゐなかった。彼は「おとつつあん。」と大きな声をだして呼んでみたが、返事がなかった。さっき、いやにせか／＼してゐたから、急に用を思ひだして、また出かけて行つたのかもしれない。しかし、こんなおもひをして買つてきたのと思ふと、彼はくやしかった。

吾一はそとへ遊びに行きたかつたが、あいにく、おっかさんもゐないので、買つてきたものを置きっぱなしにして行くわけにはいかなかった。こんなにしてゐると、焼きイモがつめたくなつてしまふ。彼はさめないやうにと思つて、袋のまゝふところに入れて、あつためてゐた。しかし、おとつつあんも、おっかさんも、なか／＼帰つてこなかつた。

と、えりとえりの合はせ目から、なんともいへない香ばしいにほひが、ほど合ひのあつたかさを持つて、ぼうつとのぼつてくる。吾一は大いに誘惑を感じたが、思ひ切つ

て、両方のえりをびしんとかき合はせて、顔を横の方に向けてゐた。それでも、あごの下の方から、香ばしいにほひがあがつてきたが、彼は目をつぶって、我慢をしてゐた。すると、今度は焼きイモのぬくもりで、おなかぐだんぐだん／＼あつたかくなつてきた。あつたかになつてくると、腹がとき／＼ガマのやうに、ぐうと、うなりだした。

その頃、吾一はおやつをたべてゐなかつたから、わけても腹がすいてゐた。お小づかひをもらはないわけではないけれども、小づかひは毎日貯金箱にはふり込むことにしてゐた。買ひ食ひをしないで、小づかひはなるたけ貯金をするやうにと、学校で先生からいはれて以来、それを実行してゐるのである。しかし三時ごろになると、毎日おなかぐすいてたまらなかつた。けれども、そこを我慢して、小づかひをつかはないやうにしながら、くつてはいけないのだと思つてこらへてきたが、けふは、ふところのなかにすばらしいものを持つてゐるのである。しかも、これをたべたところが、貯金は少しもへるわけではない。あごの下からは、あひ変はらず香ばしいにほひが鼻を突いてきた。焼きイモのにはひとふものは、特別、鼻を刺激する。

「お駄賃に、一つぐらゐいゝだらう。」

とう／＼、こらへられなくなつて、吾一は袋のなかに手を突っ込んだ。

けふのは丸焼きなので、わけてもうまかつた。彼は夢中で一つたひらげてしまった。一つたべると、前よりもかへつて食欲が増してくる。と、ひとりでに手がふところのなかにはいつて、また一つ取りだした。さっきの焼きイモ屋での不愉快なことなんか、もうすっかり忘れてしまつてゐた。

そして、一つ、二つとたべてゐるうちに、一先ぐらゐの焼きイモは、いつのまにかなくなつて、ふところのなかは新聞紙の袋だけになつてしまつた。

べしゃんこになつてゐる袋が指のさきにさはつた時、吾一はいひやうのない寂しさにおそはれた。彼は泣きだしさうな顔をして、膝の前に二つ三つ、枯れ葉のやうに散らばつてゐる焼きイモの皮を見つめてゐた。

やがて、おとつつあんがどこからか、あたふたと歸つてきた。おとつつあんはあがりが早いか、焼きイモはどうした、といった。

吾一は答へられないので、下を向いてしまった。そして、つめたくなつてゐるイモの皮をわけもなく引っぱった。

「なんだ。食つてしまったのか。しやうのないやつだな。」

おとつつあんはキセルで、火鉢のふちを強くたゝいた。

吾一は思はず、すゝりあげた。

「バカ、泣くやつがあるか。」

おとつつあんはさういつて叱つたが、きつとまた、銅貨を投げるのだらうと思つた。さうしたら、さっきのやうな、いやなことはあつたけれど、吾一は喜んで、もう一度、イモ屋に駆けて行くつもりだった。

しかし、おとつつあんはさいふをだすやうなやうすはなかった。つかれたやうな顔をして、たゞキセルをくはへてゐるだけだった。

吾一にはそれがまた、たまらなく悲しかった。

ふいに、おとつつあんの声がした。

「おい、なんだって、そんなところに焼きイモの皮なんか残しておくんだ。早くかたづけちまへ。」

それから、いくんちもたゝない時のことである。

おやつをたべないものだから、吾一は腹がへってたまらなかつた。貯金なんて腹がへってやりきれないから、やめてしまはうかと思つたが、先生にいはれた事が守れないのはくやしいと思つた。ところが、ほかの友だちに聞いてみると、友だちもみんなやめてしまったといふ。「それぢや、おれも……」と、ひょいと、よわ気になりかけたが、彼はかういふ時、かへって、えこちになる子供だった。

「よし、それなら、おれがやり通してみせる。」

が、どう頑張つてみても、腹のへることは同じだった。あるとき彼はうちの前で、ふと、コマをおとした。取らうと思つて縁の下をのぞくと、サツマイモがワラのなかにころがつてゐる。どうしてこんなところに、おサツをころがしておくんだらうと不思議に